

君の臍臓を食べてい

二年三組

田中雪菜

「一日の価値は全部一緒なんだから、何を

したかの差なんかで私の今日の価値は変わら

ない。私は今日、楽しかったよ。」

ほとんどの人が「明日が来るのは当たり前」

と考え、何気なく生き、生活していると思

います。「君の臍臓を食べたい」の中で死が確

定している桜良は、「生」を周りと違う視点

で見ているかもしれません。そんな桜良に関

わる春樹も、また別の見方を持っているの

はないでしょうか。

私の選んだ小説「君の臍臓を食べたい」は、

臍臓の病気を持ち、余命宣告を受けた山内桜

良と、彼女の事情を知った主人公の志賀春樹

が共に過ごす物語です。趣味や性格がまるで

違う高校生の二人が、互いについて学び、心

を通わせる「事になります。のちに桜良の病

気が悪化し、入院する羽目になっ、てしまいま

すか、数週間後、無事に退院します。二人は

退院の日にかつて待ち合わせを予定してい
 たものの、桜良は何時間たっても到着しない
 ため春樹は帰ってしまします。その晩、桜良
 が来なかつた思いがけない理由を、彼は知る
 事に。

「君にとく、生きる、ていうのは、どう
 いうこと？」

春樹が入院中の桜良へこれを問い掛けた場面
 には、強い印象を受けました。この一言に対
 して、私は「人生の中で生きがいを見つけ、

過ぎす事」と答えるでしょう。しかし、桜良
 の返答をまとめるに、誰かと心を通わせる事。
 誰かへの感情、認識などの人と自分の関係が、
 生きる事です。私の回答は自分を重視した
 ものですが、桜良は主に他人とのつながりを
 考えています。こうして登場人物の心境や考
 え方を提示しながらも、読者に少しとどま
 て小説の中の物事について考えさせたり、あ
 る種の教訓を与えているところがあります。それ
 可能にする著者の住野よるさんの表現力に感

心しました。また、あまり人に興味を持たな
 い春樹と、社交的で明るい桜良が関わり、心
 を通わせた「事により、春樹はこの一つの関
 係で「生きる」事が出来たのではないかと、こ
 感じました。
 物語を通して、桜良が「まもなく死ぬ」と
 いう現実に嘆き落ち込んでいる場面や、それ
 を読者に連想させるような表現は少ないです。
 描かれているのは自分に残された時間と向き
 合っている、それをどれだけ楽しく、充実させて
 過せるかという事を意識している彼女であり、
 この「向き合う」考え方が出来ている桜良は
 やはり強い人で、周りとは違う見方、思考、
 価値観を持っています。人との関係
 を大事にする彼女が周囲を悲しませないため
 に明るく振る舞っている事もあり得ますが、
 普通に過ごしたいか故に病気にいつて悟らせ
 ないようにしていたのかもかもしれません。事情
 をクラスメイトに明かしてはいれば、余命が近
 づくにつれて周りの視線は同情めいたものに

なっていく可能性があります。死が確定して
 いる中、普通に過ごさず、というのは桜良にと
 って幸せな事だったのかもかもしれません。自
 分の置かれている状況を「忘れさせて」くれ
 て、自身の辛い気持ちを持ちが軽減されていた事も
 考えられます。実際に、桜良の母親は終盤で
 「あの子も、よく泣いてた」と語っています
 た。辛くて悲しくて家で泣いてても、学校では
 心配をかけないようにと周りに明るく接し、
 そんな毎日を生きた結果、自分の心情に気づ
 かれず、普通に生きれたのだと思います。
 この本を読んで、春樹と同様に、桜良に色
 んな事を教えてもらいました。命について、
 日常について、生について、死について。
 かわれている彼女の一言一語には大きな意味が
 あり、桜良自身の生き方、混ざっているのでは
 と私は解釈しています。物語後半のある場面
 で彼女がふと溢した。「私が、本当は死ぬのか
 めちゃくちゃ怖いで言ったら、どうする？」
 を見て少し泣いてしまいましたが、怖くない訳

かないよね。それが本心なら、病気が発覚してから他人にどれだけ気を遣って明るくしていたの。そんな事を考えながら読み続け、最後の思いもなかった展開でついに涙が溢れてしまいました。住野よるさんは小説の前半の多くを高校生男女の至って普通なやり取りで埋める事で、読者への結末の衝撃を大きくしていたと思います。

明日が来る事は、当然のようで当然じゃない。私も桜良がしたように毎日を後悔しない

ように、充実させて「生きて」いきたい。春樹のように、人と関わる機会を徐々に増やして「生きて」いきたい。そう思わせてくれる小説でした。

自我の哀れ

高等部二年一組

柳澤

百花

夏目漱石著作

『こゝろ』は、

江戸―明治―

大正という時代の間で、個人主義を志向しつ

つも利己主義に陥つてしまふジレンマに苦し

み、空疎な空間下しかない『心』と、そのよ

うな『心』をかかえ生きていく人間という不

可思議な存在を描いている。もとより、漱石

の人生を賭けたテーマというのは、近代化する

る日本において、日本人の自我はどうあるべ

きか』といえる。イギリス留学の経験から、

漱石は西洋の個人主義を日本人が学ぶことの

必要性を認識しつつも、それに伴う利己主義

を克服するほどの必要性にも気づいていたの

であらう。本稿では近代文学における唯一無

二の存在、夏目漱石の代表作を借りて、近代

化の苦悩とも呼べる『個と全体性の矛盾』を

漱石自身の慧眼から論議する。

作中では何度が、明治天皇の崩御と乃木希

典の殉死について触れる部分がある。乃木希

典とは陸軍大将で、明治天皇が崩御したためにその後を追って、自ら切腹して殉死した人物である。この事件が発生した當時はかなり賛否両論があつた。いわゆる森鷗外などの年配の作家は、江戸時代の侍の切腹の文化を引き合いに出して乃木希典の殉死を称賛した。一方下芥川龍之介などの若手の作家は西洋の個人主義の風潮を強く受けているために、殉死という旧式の道徳観を強く非難した。このような世代によって分かれる賛否両論が示す

ように、明治時代から大正時代への移り変わりとは、道徳観が一変した瞬間であつた。一つの要因としては、大正デモクラシーの言葉通り、天皇主権であつた当時の日本に民主主義の時代が到来し、急に個人主義の考えが色濃くなつたといわれている。恋愛ひとつ、でも価値観は大きく変わった。『いゝろ』の中下、『変は罪悪ですよ。』という一文がある。日本は西洋と異なり、キリスト教や市民革命の歴史がない為、個人主義

は単なる「利己的な利益の追求」に矮小化される面がある。そうした日本では、恋愛は、宗教や社会制度による共通の価値観がない中、自分と他者の利害が真っ向から衝突するものである。誰かが想い人と結ばれるというよりは、誰かがその人と結ばれないという点であり、恋愛とはその点において、罪悪であり神聖。しかし、先生とお嬢さんの結婚は、完全な交際結婚とは言い切れず、己の道を究める為に生き、交際を拒みつつ自殺したKの生き方も、特定の思想を全面的に肯定する描かれ方とは言えない。

漱石は、日本人が個人主義を持つことの必要性を訴えつつ、それによって人々の精神的紐帯が失われることの寂しさについても言及しているのだ。先生もKも、その寂しさに耐えられなかったのだ。そして、読者はそんな「私」のようにな垢な視点を通して、先生の心と邂逅する。Kが失墜ともいえぬ失恋に傷つき、友人の裏切

リ行為で自死した一連の流れは、一般化され
た現代のこの裏目を露呈している。〇・
〇一ミリの悪意で人は死んでしまうという弱
さ。それは哲学ではなく文学下しか掛けぬ心
の機微なのではないか。

その一方で、メディアの革新は人間の心を
大きく変えろことも可能である。それは単な
る道具や媒体ではなく、使いよう一つでモノ
ではなくなる。それは、個々の死生観や社会
通念、人間関係を根底から覆しかねない一あ

る力であり、そのスピード感と相互依存性
拡張力は、人間の意識をも変えてしまうので
ある。混沌する時代、日本人も近代的自我を
確立しなけねばならないと思う一方で、先生
やK、そして「知」のような人々の存在を揺
てようにも揺て切れない——そんな漱石の人間
に対する愛憎が、「ここに込められてい
る。

国際化によつて各国の利害関係が複雑化し
た現在、日本人は国家や共同体ではなく、個

人の信念に従って生きる必要も増える。西洋
のキリスト教的価値観も、イスラム教勢力の
増大に伴い、問い直される。その最中、震
災時の報道に見られた「絆」や「思いやり」
といった、日本人の共同体主義的な価値観も
問い直される。天皇崩御による殉死、利己主
義の罪悪感、いささが現代の我々には理解し
難い道徳感だが、二十年代を生きる我々
の道徳感も、いずれ未来人に理解されない時
が来るのではないか。